

## I. 監査等委員会の運営 1-2. 監査等委員会の主な決議事項 p. 6

	2020年版	2021年版改訂案	理由・根拠
監査等のツボ	<新設>	<p>(2)監査等委員会は、監査等委員の候補者、監査等委員候補者の選定方針の内容、監査等委員選任議案を決定する手続について、取締役との間であらかじめ協議の機会をもつことが望ましい。その上で、取締役の提案する選任議案に不同意の場合は、会社法で規定された権限である選任議案提案請求権の活用を検討する。</p> <p>番号(2)以下、繰り下げ (2)⇒(3)、(3)⇒(4)</p>	<p>監査等委員の選定につき、受動的な同意に留まらずに、監査等委員会としての要望を積極的に反映させる姿勢を持つことが望ましい点を明確にした。</p> <p>日本監査役協会「監査等委員会監査等基準」第7条にも同様の趣旨の規定がある。</p>

## II. 監査等委員会の監査の環境整備 p. 9

	2020年版	2021年版改訂案	理由・根拠
監査等のツボ	<新設>	<p>(8)監査等委員会は、監査計画作成に当たって、所要の費用を見積もり、会社に予算請求する。その職務の執行において予算外の前払金・費用が発生したとき(弁護士等社外の専門家に調査・助言等を委託するなどを含む。)も会社に請求する。会社は、その費用が監査等委員会の職務の執行に必要なことを証明した場合を除き、これを拒むことができず、支払わなければならない(会社399の2④)。監査等委員会の職務上の費用の処理についての方針は、内部統制システムの決議事項となっている。その実効性を持たせるために社内規則等を定めていることを確認する。なお、費用として、監査等委員会の職務遂行上に必要な知識の習得のための、研修参加費用、参考図書購入費用等も含めることができる。</p>	<p>本項目の[説明](2)③「監査等職務の執行について生じる費用等の会社への請求」に関し、[監査等のツボ]に記述を追加した。</p> <p>監査等委員会が設置した調査委員会の費用を会社側が支払いを拒否する事例を踏まえ、会社法の趣旨を明確にした上で、それを実効化するための措置を社内ルール化しておく必要があることを再確認した。</p>

Ⅲ. 業務監査 Ⅲ-2. 取締役会における監督状況の監査 p. 16

	2020 年版	2021 年版改訂案	理由・根拠
監査等のツボ	<新設>	(6) 会社と取締役との利益が相反する状況にあるとき株主の利益を損なうおそれがあるため（例えば、マネジメント・バイアウト（MBO）や親子会社間取引等のとき）、その都度、取締役会の決議により、社外取締役に当該業務の執行を委託できる（会社 348 の 2）。ただし、委託された業務を業務執行取締役の指揮命令により執行した場合は、業務執行の独立性が疑われ、会社法第 2 条十五号イに規定する社外取締役の要件を満たさなくなる。社外取締役（特に、監査等委員）が委託を受けるときは、監査等委員会において業務執行の利益相反性や独立性等を慎重に検討することが望ましい。	令和元年改正会社法 348 条の 2 に新たに規定される「業務の社外取締役への委託」について、監査等委員である社外取締役が委託を受けることも想定されるので、取締役会での審議とともに、監査等委員会でも十分に検討することが望ましいと考えられる旨を記載した。

Ⅵ. 監査等委員以外の取締役の選任・解任・辞任・報酬等についての意見の決定 p. 24

	2020 年版	2021 年版改訂案	理由・根拠
説明	（監査等委員以外の取締役の報酬等についての意見形成の着眼点） (4) 報酬等の意見形成においては、報酬体系（定額報酬、賞与、業績連動報酬、ストックオプション等）の有無を確認し、業績との関連での報酬額の基準等について透明性、公正性を高めることに重点をおく。その上で、①監査等委員以外の取締役のそれぞれの業績評価、②会社に対する貢献度を検証し、③報酬体系の中での位置づけについての意見を決定する。なお、役員の報酬体系、業績との関連での報酬額の基準等についての意見形成のみ行い、個別の取締役の報酬等についての意見形成はしないという考え方もある。	（監査等委員以外の取締役の報酬等についての意見形成の着眼点） <文章修正> (4) 報酬等の意見形成においては、会社の報酬体系（定額報酬、賞与、業績連動報酬、ストックオプション等）の内容（会社 361①）を確認し、透明性、公正性、業務執行取締役へのインセンティブ効果が期待できるか等を検討する。その上で、取締役会の決定する「取締役の個人別の報酬等の内容についての決定に関する方針」の内容（会社 361⑦、会社規 98 の 5）が適切であるかを検討し、監査等委員以外のそれぞれの取締役への適用状況について、①業績評価、②会社に対する貢献度、③報酬体系の中での位置づけを確認する。	令和元年改正会社法では、監査等委員以外の取締役へのインセンティブ報酬として業績連動報酬（募集株式、募集新株予約権）に関する規律及び個人別報酬等の方針の決定等が定められた（会社 361）。監査等委員以外の取締役の報酬等についての監査等委員会の意見形成もそれに係る取締役会等の対応状況に重点をおくべきとし、記述を変更した。

	2020 年版	2021 年版	理由・根拠
確認事項	<p>&lt;新設&gt;</p> <p>□ 7. 各監査等委員は、株主代表訴訟における会社の被告取締役側への補助参加の同意に際し、監査等委員会での協議を経て、同意するか否かの意思表示を行った。</p>	<p><b>□ 4. 取締役の対応が、独立性、中立性又は透明性等の観点から適切でないと認められたため、第三者委員会の設置を勧告し、必要に応じて自ら依頼して第三者委員会を立ち上げることに努めた。</b></p> <p>以下、番号を繰り下げ  □ 4 ⇒ □ 5、□ 5 ⇒ □ 6、□ 6 ⇒ □ 7、  □ 7. ⇒ □ 8  &lt;番号、文章修正&gt;</p> <p>□ 8. 各監査等委員は、株主代表訴訟における会社の被告取締役側への補助参加<b>又は和解</b>の同意に際し、監査等委員会での協議を経て、同意するか否かの意思表示を行った。</p>	<p>取締役の対応に問題がある場合は、監査等委員会が自ら第三者委員会を立ち上げるべきである点を明確にし、[確認事項]とした。</p> <p>令和元年改正会社法 849 条の 2 に監査等委員の全員の同意の対象として「和解」が含まれることになったため、[確認事項]□ 8. はそれを含めた文言に修正した。</p>
説明	<p>(不祥事発生時の対応)</p> <p>(2) 監査等委員会は、企業不祥事（法令・定款に違反する行為、その他社会的批判を招く不正又は不適切な行為をいう。）が発生した場合、又は、発生するおそれが生じていると判断した場合、直ちに取締役等に対して報告を求めるとともに、代表取締役等又は取締役会に対し、その事実関係の把握、原因究明、損害の拡大防止、対外的開示等の具体的対応方針の立案、決定を要請する。必要と認めるときは、社内調査委員会、又は、外部の独立した弁護士等に依頼して設ける第三者委員会の設置を求める。</p> <p>(調査委員会への対応)</p> <p>(3) 監査等委員会は、初期対応の後も引き続き代表取締役等から対応状況の説明を受ける。社内調査委員会又は第三者委</p>	<p><b>(不祥事発生時の初期対応)</b></p> <p>&lt;小見出し修正 (2) 本文の修正なし&gt;</p> <p><b>(初期対応後の継続的対応)</b> &lt;小見出し修正、文章一部削除&gt;</p> <p>(3) 監査等委員会は、初期対応の後も引き続き代表取締役等から対応状況の説明を受ける。社内調査委員会又は第三者委</p>	<p>取締役の対応に問題がある場合は、監査等委員会が自ら第三者委員会を立ち上げるべきである点を[確認事項]に置いたことから、従前の説明(2)(3)を(2)（不祥事発生時の初期対応）(3)（初期対応後の継続的対応）についての説明に改め、文言を一部修正した。</p> <p>また、説明(4)として(第三者委員会設置の勧告等)を新設した。</p> <p>「社外監査等委員が第三者委員会の委員に就任する」点は、削除し新設の説明(4)に移行した。</p>

<p>説明 つづ き</p>	<p>員会が設置されている場合は、当該委員会からの説明を受ける。必要と認めるときは、社外監査等委員が第三者委員会の委員に就任することを求める。</p> <p>&lt;新設&gt;</p> <p>(取締役に対する責任追及等の訴えへの補助参加への同意)</p> <p>(7) 会社が取締役を補助するため責任追及等の訴えに係る訴訟(株主代表訴訟等)に参加するときは、各監査等委員の同意を得なければならない(会社 849③)。</p>	<p>員会が設置されている場合は、当該委員会からの説明を受ける。</p> <p><b>(第三者委員会設置の勧告等)</b></p> <p><b>(4) 監査等委員会は取締役の対応が、独立性、中立性又は透明性等の観点から適切でないと認められる場合には、監査等委員会における協議を経て、取締役に対して、外部の独立した弁護士等に依頼して行う第三者委員会の設置の勧告を行い、必要に応じて弁護士等に自ら依頼して第三者委員会を立ち上げる、あるいは社外監査等委員が第三者委員会に出席する又は委員に就任するなど適切な措置を講じる。</b></p> <p>以下、番号繰り下げ (4)⇒(5)、(5)⇒(6)、(6)⇒(7)、(7)⇒(8) &lt;番号修正、小見出し修正、文章修正&gt;</p> <p>(取締役に対する責任追及等の訴えへの補助参加・<b>和解</b>への同意)</p> <p><b>(8) 会社が取締役を補助するため責任追及等の訴えに係る訴訟(株主代表訴訟等)に参加するときは、又は当該訴えにおける和解をするときは、各監査等委員の同意を得なければならない(会社 849③・849の2)。</b></p>	<p>取締役の企業不祥事への対応に問題がある場合、監査等委員会のとるべき措置を明確にした。</p> <p>令和元年改正会社法 849 条の 2 に監査等委員の全員の同意の対象として「和解」が含まれることになったため、それを含めた文言に修正した。</p>
------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

別紙 1 - 【参考】監査等委員会の決議事項等の例 p.30 3. 監査等委員の全員の同意を必要とする事項についての監査等委員会での協議

	2020 年版	2021 年版	理由・根拠
	<p>&lt;新設&gt;</p>	<p><b>(7) 責任追及等の訴えに係る訴訟(株主代表訴訟等)において会社が和解すること(会社 849 の 2)</b></p>	<p>令和元年改正会社法 849 条の 2 により「和解」も監査等委員の全員の同意が必要となった。</p>